

トラック 19-1

或る村で、スルタンがとても冷たい水の井戸を持っていた。彼は村人にお触れを出した。「この井戸で翌朝まで眠るような人間がいれば、両の手に金を与えよう」。

おばあさんと一緒に暮らしていた孤児がいた。彼はおばあさんに言った。「僕がスルタンに会いに行くと、井戸で寝るといふ挑戦をしてこよう」。

おばあさんは駄目だと答えたが彼は言い張った。彼はスルタンに会いに行くと、自分の意向を知らせた。

「僕はマグレブの祈りの時、17時半から18時半の間に井戸に入って寝ます。翌日の朝、アシュビヒ(ファジュール)の祈りの時、5時半に井戸を開けてください」。

人々は彼に、死ぬことになると言ったが彼は答えた。「大したことじゃありません。僕には失うものなんかありません。父も母もいない孤児なんですから」。

その日が来て、彼は井戸の中に入り、蓋が閉じられた。おばあさんは孫のことが心配になって、その場所まで行って火を起こした。彼女は井戸に近づき孫と話そうとした。「私の声が聞こえるかい？」。

彼女は孫に何度も呼びかけたが答えはなかった。彼女は日の出まで井戸の傍に留まっていた。太陽が昇って、井戸が開けられ、彼が生きてそのまま引き出された。スルタンは彼が活着ていることに驚いた。子供は約束の褒美を求めたが、スルタンはそれを拒んで、その理由を言った。「褒美だと？ お前のばあさんが一晩中火を起こしていて、それがお前を暖めたというのか？」。「何ですって？ 僕は何ももらえないのですか？」。

「何もやらん」。

彼は、イブ・ナッシュヤに会いに行き、自分に起こったことを知らせた。イブ・ナッシュヤは、心配ない、褒美を取ってやろうと彼に言った。イブ・ナッシュヤは子山羊、牛、米、バナナ、マニョックを集めて自分の畑のひとつに行った。彼は村人を大食事会に招待した。そうするうちに彼は大きな壁を立てて、料理を煮る火と、鍋の中の料理とを隔てた。皆が驚いて彼に尋ねた。「一体何をしているんだ。料理が火の上に置かれていないのに、どうやって料理を作るんだ！」。

彼は答えた。「心配ないよ。料理は出来る！」。

10時半頃、村人は火を保つためにずっと火に息を吹きかけていたが、鍋は料理されなかった。

ひとりの人がスルタンのところに行って、一方に火があり、片方に料理があるという、イブ・ナッシュヤのところでは繰り返されているおかしい出来事を知らせた。スルタンは彼の頭がおかしいと決め付けた。

昼になってスルタンは昼食にあずかろうとイブ・ナッシュヤのところに行ったが、イブ・ナッシュヤは言った。「食事はまだ出来ていません。火をずっと吹いているんですがね」。

スルタンは話に割って入った。「一体お前は どうやって食事を作ろうとしているのだ。火は一方にあって、鍋が別のところにあると

いうのに」。

イブ・ナッシュュヤは答えた。

「やっとその件になりましたね！ それじゃ、どうして井戸の外にある火が、井戸の中に一晩中いた子供を暖めることが出来るなんて思えたんですか？ あなたが自分自身でそんなことはあり得ないと主張したからには、この子に正当に戻されるものをおやりなさい」。

スルタンは自分の非を認めて、イブ・ナッシュュヤに食事を作るよう頼み、食事の後、町に戻って孤児に公共の場で褒美を与えることを約束した。

その間、同じ村でひとりの男が、スルタンの娘をものにするのを夢見ていた。彼はその夢を何人かの人に語ったが、彼は言われた。

「何てことを言うんだ！ お前は正気か！ 死にたいのか？」。

「でも、本当なんだ。夢にまで見る」。

その話を立ち聞きした者が、その場を去ってスルタンにすべてを語った。スルタンはその妄想家を探そう命じた。スルタンの命によって、彼は投獄され、打たれ、拷問された。

投獄された男の両親が、イブ・ナッシュュヤによって救われた孤児の話を出し、彼に相談をしに行った。

「イブ・ナッシュュヤ、私たちの息子はスルタンの娘を夢に見たということで牢屋に入れられました。助けて下さい！」。

「見返りは何になる？」。

「好きなように！」。

「それでは、子山羊と牛を一頭ずつ」。

木曜日にイブ・ナッシュュヤは公共の広場に、穿孔ハンマーを持って行き、金曜モスクの床に穴を開け始めた。人々はスルタンに、イブ・ナッシュュヤの破壊行為を知らせに行き、スルタンは臣下たちに伴われて、モスクにやって来た。

「イブ・ナッシュュヤ、何をしているのだ？」。

「昨晚の夢で、ここに、モスクのここに金があるといわれたのです。だから、見つかるまで掘るのをやめるわけにはいきません」。

「やめるんだ。何にもありはしない、そんなことがあるものか！ 夢に過ぎないのだ！ 夢は幻なのだ！」。

「スルタンさま、夢が幻であるというのは確かですね」。

「まったく当たり前だ！」。

「それでは、あなたの娘と寝たという夢を見たのを口実に、ひとりの男を牢に入れていたのは何故ですか？ もし、僕の夢が本当に偽りのことなら、その若者を自由にして下さい。もしそうでないなら、僕は夢で見たお宝を見つけるまで掘り続けますから。そうすると明日の金曜は、あなたはモスクでお祈りが出来なくなりますよ」。

スルタンは非を認めて、若者を放免した。

かつて、イブ・ナッシュュヤは自分の畑に隠れ住んでいたが、彼のおばあさんは町に住んでいた。

彼は父母のいない孤児だった。彼は、毎金曜におばあさんを訪ねていた。スルタンはいつもイブ・ナッシュュヤに侮辱されるのに耐えられなくなり、彼のおばあさんの家に火を放つことに決めた。或る人がイブ・ナッシュュヤにスルタンの企みを知らせた。彼はおばあさんを探しに行き、彼女を自分の畑に連れて行って隠れることにした。

丘の上からイブ・ナッシュュヤはおばあさんの家が燃えるのが見えた。彼は急いで町の方に下り、村人たちはおばあさんを助けようとし、また火を消そうとした。彼らはおばあさんが安全なところにいたことを知らず、おばあさんの代わりに人形がいたのだった。イブ・ナッシュュヤはおばあさんの死を嘆くふりをした。

火が消し止められた後、彼は家の中で見つかった灰を集め、丸木舟に乗って遺灰を売りに海に出た。イブ・ナッシュュヤは一艘の船に出会い、叫んだ。

「おばあさんの遺灰を買ってくれませんか！」。

その船はイブ・ナッシュュヤの丸木舟とぶつかってしまい、彼は溺れた。彼は引き上げられてから言った。

「丸木舟には金銀が積んであり、弁償しなければスルタンに訴える」。

その船はマジュンガから来ていた。船乗りたちは、スルタンと関わるのを避けるために、イブ・ナッシュュヤに金を与えて弁償した。彼はマジュンガに家を借りて身を落ち着けた。

しかし、一ヶ月後に、大家が工事をするというので、引き払うことになった。その間にイブ・ナッシュュヤは一匹の犬を殺して家の隙間に押し込んでおいた。犬は腐り始めて、家中ひどい臭いがした。大家は死んだ犬を見つけて、この家に住むことを拒否した。というのも彼らはムスリムだったからである。彼らはその家をイブ・ナッシュュヤに譲った。彼は村人に言った。

「いいかい？ あんた方は僕のおばあさんを殺そうとしたけど、おばあさんの灰のおかげで僕は金持ちになって、今ではあんた方が僕の使用人だ」。

これを聞いて、村人のある者は彼らのおばあさんを殺し、丸木舟で灰を売りに行くことに決めた。あちこちを渡る船乗りたちは、「おばあさんの遺灰を買ってくれませんか」というメッセージの意味がわからなかった。船乗りは誰も遺灰など買わず、怒った村人たちはイブ・ナッシュュヤを殺そうとした。

毎週金曜日に彼はモスクに行った。その日彼は、スルタンの娘と結婚する誰かを探す必要があった。イブ・ナッシュュヤは南京袋にくるまって公共の広場で叫んだ。

「結婚なんかしたくない！ 嫌だ！ 殺されても結婚なんかしないぞ」。

スルタンの娘に結婚の申し込みをしたが叶えられなかった或る金持ちが通りかかって、イブ・ナッシュュヤの叫びを聞いた。

「一体どうしたんだい？」。

「僕をスルタンの娘と無理やり結婚させようとするのだけれど、僕はいやなんだ」。

「助けてあげようか？」。

「もちろん」。

助けられたイブ・ナッシュュヤは、その金持ちを南京袋に閉じ込めた。その金持ちはイブ・ナッシュュヤと同じ話を言い立てた。村人たちが近寄り、彼の話聞き、海に投げ込んだ。そしてイブ・ナッシュュヤは金持ちの財産を奪ったのだった。